

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 近藤 行人

論文題目 日本とウズベキスタンを対象とした異文化間レトリック研究  
—論証文における文章と文章観の多様性—

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	衣川 隆生
委 員	名古屋大学教授	浮葉 正親
委 員	名古屋大学准教授	佐藤 弘毅
委 員	東京大学准教授	宇佐美 洋

本論文は、ウズベキスタンの日本語学習者が抱える「書くこと」に関する問題の背景を明らかにするため、ウズベク人日本語学習者、日本人母語話者、ウズベク人母語話者を対象として、それぞれの社会文化的な背景が、彼らの書く作文の文章構造とその内容、及び文章観にどのように影響しているかを複数の調査結果から実証的に検証し、さらにそこで得られた知見に基づいた教育実践方法を提言しようとしたものである。以下、本論文の概要と評価結果を報告する。

#### [本論文の概要]

本論文は、研究の背景と問題意識を述べた「序」、対照修辞学から異文化間レトリックへの先行研究の歴史的な流れと本研究の目的を述べた「第1部」、ウズベク人日本語学習者、日本人母語話者、ウズベク人母語話者が書く作文の文章構造と内容の特徴、及び彼らの社会文化的な背景が文章構造と内容に与える影響を量的に分析した「第2部」、ウズベク人ウズベク語教師、日本人国語・日本語教師、及びウズベク人日本語教師の文章観とその形成過程を質的に分析した「第3部」、第2部、第3部で得られた知見を教育実践へ応用しその結果を検証した「第4部」、「結」の6部から構成されている。

第1部第2章では、本論文が理論的背景としている対照修辞学及び異文化間レトリック研究を歴史的に概観し、第3章では本論文では、ウズベク人日本語学習者、日本人母語話者、ウズベク人母語話者を対象として、それぞれの社会文化的な背景が、彼らの書く作文の文章構造とその内容、及び文章観にどのように影響しているかを明らかにすることが目的であるとしている。

第2部では、日本人大学生、ウズベク人大学生、ウズベク人大学生の日本語学習者という3群を対象者群として設定し、それぞれの社会文化的背景が彼らの書く作文の文章構造と内容にどのような影響を与えるかが検証されている。まず第4、5章では、研究の枠組みとして、「死刑制度への賛否」というテーマで、大学や日本語学校等で最もよく書かれる文章の一つである論証文を取り上げることが説明されている。第6章では論証の要素を基にした構成単位を設定し、それぞれの群の論証文に見られる文章構造の特徴が、冒頭、論証部、終結部における構成単位の出現傾向から分析されている。分析の結果、日本人大学生はまず意見表明を行い、展開部で自らの主張の論証を行い、最後にもう一度自らの立場を確認して終了するという双括型パターンが最も典型的であるのに対して、ウズベク人大学生の論証文では、意見表明する前に背景情報を組み込んだ序論を形成し、真ん中、或いは最後に意見を表明する文章を好む傾向が見られた。ウズベク人日本語学習者の論証文には、ウズベキスタン型の文章構造を持つ論証文と、冒頭に意見を表明するような文章構造の論証文が混在していることが明らかにされている。第7章では、3群の内容的な特徴を明らかにするため、論証文の説得性の比較が行われている。分析の結果、3群全てにおいて[言論]のアピールを中心とした論証文であったことが明らかとなったが、日本人大学生では[感情]が重要視され、遺族への共感といった論拠が用いられること、また、宗教に基づく論拠は書かれないことが明らかとなった。一方、ウズベク人大学

生では、[道徳] が重要視され、[感情] についても加害者遺族への共感といった日本人にはみられなかった論拠が書かれることが示されている。ウズベク人日本語学習者では、最も重要であるのが[言論] であり、このアピールを中心とした論証文を書く者と、最も重要であるのが[道徳] であり、このアピールの分量が多い論証文を書く者に二分されていることが明らかにされた。

第3部では、書き上げる作文の文章構造や内容に影響を与える要因として、ウズベク人ウズベク語教師や日本人国語・日本語教師、及びウズベク人日本語教師がどのような文章をよいと考えているかという文章観を取り上げ、その特徴と形成要因を質的に分析している。まず第9章では、文章観についての先行研究から本論文における文章観の定義づけが行われている。第10章ではこの文章観を検討するための研究方法として質的な研究手法を採用することの妥当性が検討されている。第11章では、ウズベク人ウズベク語教師と日本人国語・日本語教師の文章観の比較が行われている。その結果、ウズベク人ウズベク語教師の文章観として、導入部としての序論が丁寧に書かれ、最後に結論として意見を述べるような中括・尾括型の文章を好んでいること、被害者感情と結びつけられた簡潔な記述には、違和感を持ち、論理性のない感情的な意見だと感じていること、エピグラフや文学的な事実の引用、宗教的観点からの考察などは書き手の教養の高さや思慮深さを示しており、説得性の源となることが示されている。その一方、日本人国語・日本語教師の文章観として、冒頭で明確に立場を表明し、論拠を述べて再度立場を表明して終わる双括型の文章構造になじみがあること、データや具体的事例を伴い、無駄な情報を省いて、簡潔に記述された作文は論理性があり説得力があると捉えていること、ウズベキスタンの書き手の書いた作文は、感情的であり、また宗教的記述やエピグラフの使用に対して、身近ではないと感じることが示された。これに続く第12章では、学習者であるという背景を有しているウズベク人日本語教師の文章観が分析されている。分析の結果、日本型の文章をよいと考える教師、ウズベク型の文章をよいと考える教師という対照的な文章観がみられた。一方で、両者の異なりを認識しながら、文章観を形成していた教師もいたことも示されている。第13章では、11章及び12章の結果を基に文章観の異なりがどこから来るのかについて考察がなされている。異なりの要因として、心情的価値観や社会的規範といった道徳的な価値観が関わっており、これらの価値観は社会文化的な影響を強く受けていることが論じられている。また、新たな文章の学習とは、新たな価値観の学習であり、これを変容的学習という観点から捉え、質の高い知識を得ることが必要であることも示唆している。

第4部では、先行研究及び第2部、第3部で得られた知見を基に、ウズベク人日本語学習者を対象として「自分の文章の特徴を知り、読み手の想定にそった文章に修正することを通じて、多様な文章と文章観を知る」ことを目的とした作文教育実践への応用が試みられている。実践の結果、学習者は日本とウズベキスタンで異なる文章や異なる考え方が存在していることに気づき、また、これまでの自分自身のライティングを振り返って、自分自身の文章観がどのように形成されたのかを考えていたことが示された。そして、自分とは異なる様々な考えを持った

読み手に合わせ、文章を読み手に向けて書く重要性に気が付いたと語っていることも示されている。これらのことから、これまでの様々な文章を書いた経験によって自分自身の文章が形成されていることを知り、そのうえで読み手に合わせた文章を書くことができるような作文教育を行うことの意義が述べられている。

#### [本論文の評価]

以上のように、本論文は、日本とウズベキスタンを対象として、それぞれの母語話者及び学習者という3つの視点から文章構造、内容の特徴を分析し、それぞれの文章構造、内容が社会文化的背景によって影響を受けて異なっていること、そして、学習者は、この母文化、あるいは学習対象となる社会文化の影響を一方的に受け入れているわけではなく、それぞれが経験をどう受け止めているかによって、文章観及び彼らが書く文章が形成されていることを示している。

口述審査においては、Small Culture と Large Culture が文章構造、内容と文章観に与える影響を考察しきれていないのではないかという点、第2部の研究参加者のサンプリング方法が、研究目的に照らし適切ではなかったのではないかという点、第2部と第3部の研究参加者の属性が異なることについて十分な説明がないという点が課題として委員から提示された。しかしながら、上記の課題を認識したうえで、考えうる最も妥当性のある資料収集方法を考案し、分析に際しては信頼性と妥当性を高めるための手続きを踏み追証可能な方法論を提示していることは、今後、同様の研究を行う際の指針を示す論文であると高く評価された。また、第2部において量的な分析手法を用いてプロダクトとしての文章構造や内容一般性を明らかにしようと試み、第3部においては質的な分析手法を用いて個別性の高い文章観を明らかにしようとしている点、さらに、文章観に可変性があることを示し、その可変性を前提として実践の手法を試み検証している点は、対照修辞学及び異文化間レトリック領域だけでなく、言語教育領域における貢献も多大であると高く評価された。

以上の評価から、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。